Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2020, Vol.29, 228-237

報告

体験と表現で生まれる主体的・対話的で深い学び
－第２学年「ふぞくたんけんたい　しゅっぱつ」についての考察－

永 野 優 希［鹿児島大学教育学部附属小学校］

Independent, interactive and in-depth learning born out of experience and expression: A study of the second year "Fuzoku Tankentai Shuppatsu"

NAGANO Yuuki

キーワード：生活科、体験と表現、主体的・対話的で深い学び、町探検、気付き

1. はじめに

平成 29 年度に告示された学習指導要領は，子どもの資質・能力をよりよく育むことを基に，子どもの学びの質に着目した授業改善の取組の活性化を目指したものである。特に，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。このことは，生活科においても当てはまることであり，生活科において育成を目指す資質・能力をよりよく育むために，生活科における「主体的・対話的で深い学び」の姿を明らかにしながら，授業改善を図っていくことが必要である。

生活科創設期以来重視されてきた生活科の特質である，対象に直接働きかける学習活動や，活動の楽しさや気付いたことを様々な方法で表現する学習活動といった具体的な活動や体験を通した学びに，「主体的・対話的で深い学び」という新たな視点で生活科の授業を創造していくことが，今日の生活科の授業づくりに求められていることであろう。

そこで，生活科における「主体的・対話的で深い学び」の姿とはどのような姿なのか，そして，これまでの生活科の中で重視されてきた「具体的な活動や体験を通した学び」と「主体的・対話的で深い学び」との関係性はどのようなものなのかを，第２学年の町探検の単元の実践を通して検証していきたい。

2. 体験と表現で生まれる主体的・対話的で深い学びを実現する生活科学習指導の考え方

2.1. 生活科における「主体的・対話的で深い学び」の姿とは

生活科は創設期以来，「具体的な活動や体験を通して」「自立への基礎を培う」ことを目標としてきた教科である。「自立への基礎」が指す自立とは，「学習上の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」といった３つの自立のことであり，自分で考えて判断し行動できる子どもの姿，つまり主体性を兼ね備えた子どもの姿を目指したものである。平成 29 年の改定では，生活科の教科目標の「自立への基礎を養う」という文言が「自立し生活を豊かにしていく」と改定されたが，「自立」というキーワードが残っているという点から，創設期以来の理念が継承されていると言える。この理念からも分かるように，生活科は創設期から子どもの主体性を重視した教科であり，「主体的な学び」の姿

を目指してきた教科なのである。また，「具体的な活動や体験を通して」とあるように，生活科は身近な人々，自然，社会に直接働きかけたり，そのことを表現したりするといった活動や体験を重視してきた。身近な人々，自然，社会に直接働きかけるということは，子どもとそれらの対象とが相互に働きかけ合いながら，対話が生まれる。その対話を通して，子どもは対象への気付きや自分自身への気付きを獲得していくものである。また，体験を表現し交流し合う中で，自分では気付けなかったことに気付けたり，互いのよさに気付き認め合ったりするなど，新たな気付きを獲得することができる。つまり，「対話的な学び」についても創設期以来重視されてきたものであると言える。それでは，生活科における「深い学び」の姿とはどのような学びの姿と捉えるべきであるか。

生活科は，創設当初から「知識」ではなく「気付き」という言葉を大切にしてきた。気付きとは，対象に対する一人一人の認識であり，子どもの主体的な活動によって生まれるものことである。このことを踏まえると，「気付き」とは，自分とのかかわりで捉える対象に対する枠組みであると考えることができる。平成 11 年の改定では「知的な気付き」，平成 20 年の改定では「気付きの質を高める」というように，「気付き」についての考え方は少しずつ変わっているが，平成 29 年の改定でも「気付きの質を高める」ことは重視されており，生活科における「深い学び」の姿とは「気付きの質を高める」ことそのものである。「気付きの質を高める」ことが「深い学び」を実現することであると捉えることができる。

「気付きの質を高める」ためには，体験と表現の往還が必要不可欠である。対象に直接かかわる活動や体験の中で，子どもは，多くの気付きを獲得する。しかし，体験の中で生まれた気付きは，「○○（対象）は～～（特徴やよさ）だ。」「○○（対象）で・・・(活動）ができる。」と，個別的な気付きである場合が多い。また，そのような体験の中で生まれた気付きは，言語化されずに無自覚的に消えてしまうことも多い。こういった個別的な気付きや無自覚的な気付きの質を高めるためには，体験したことを振り返ったり伝え合ったりするなど体験を言語化して表現することが重要である。体験を通して獲得した気付きが自覚化されたり，他者との気付きを交流することによって，「○○（対象）は，～～（特徴やよさ）だから，・・・(活動）できるんだね。」と関係的な気付きへと高まったりしていく。そして，獲得した気付きから，「○○（対象）って面白いな。不思議だな。もっと，○○（対象）で遊んでみたいな。」と，さらなる思いや願いが生み出され，その思いや願いを基に新たな活動へと連続・発展していく。このように，体験と表現の往還の中で，対象への思いや願いが生まれ主体的な活動が展開されたり，他者との交流によって気付きの質が高められたりするなど，「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の３つの視点の学びが調和的に展開される中で，目指すべき生活科の授業に迫ることができるものと考える。

2.2. 体験と表現で生まれる主体的・対話的で深い学びを実現する生活科学習指導のポイント

ここまでを踏まえると，生活科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには，体験活動と表現活動の往還が生まれる学習過程が欠かせない。また，その往還の中で，自ら活動を生み出しながら対象に働きかけていこうとする「主体的な学び」を引き出すための働きかけや，対象や自分自身に対する気付きの質を高めていくための 「対話的な学び」を引き出すための働きかけが

必要である。　そこで，ここまでの考え方を整理し，次のような学習指導のポイントを基に授業創造していくこととする。

【ポイント１】　体験活動と表現活動をつなぐ思いや願いが生まれる単元指導計画

・　体験活動と表現活動とを子どもの思いや願いに応じて往還することができるようにするために，体験活動と表現活動を行き来する必要感が生まれる単元構成を行うことが重要である。体験活動と表現活動の往還を生み出すためには，「○○（対象）の秘密を見付けることができて嬉しいな。このことをみんなにも伝えたいな。」「○○（対象）が，～～（特徴やよさ）なことが分かったよ。でも，△△さんのように，もう少し○○（対象）のことを詳しく知りたいな。」と体験活動と表現活動とをつなぐ思いや願いが生まれる活動設定が必要となってくる。そこで，対象とのかかわりの中で子どもの思いや願いがどのように連続・発展していくのか想定したことを基に，必要な活動の洗い出しやその配列を工夫する。

【ポイント２】　対象への思いや願いが生まれる対象との出合わせ方の工夫

・　子どもの主体的な活動の原動力は，対象への思いや願いである。思いや願いをつなげるためには，まず，対象への自分事な思いや願いをもたせることが必要である。そこで，「○○（対象）で遊びましょう。」というように，こちらから活動を提示するような導入ではなく，「○○（対象）があったら何ができそうかな。」と問いかけることで，「○○（対象）で･･･（活動）ができそうだな。やってみたいな。」と子どもの中から対象と関わる活動が生まれるようにしたり，１年生を迎える会で２年生からアサガオの種をプレゼントされたことをきっかけにアサガオの栽培活動をスタートさせるといった実生活のエピソードを基に活動を設定したりするといった導入の工夫を行う。

【ポイント３】　対象や自分自身のよさを自覚的に捉える振り返りの工夫

・　活動を通して，子どもは多くの気付きを獲得するが，それらは，個別的であったり無自覚的であったりすることが多い。対象や自分自身へのよさというように，質の高まった気付きを獲得させていくためには，活動を振り返る中で，対象や自分自身のよさについて自覚的に捉えさせていくことが大切である。そこで，活動を振り返る際には，何が分かったか（見つけた），何ができるようになったか（がんばった），どんなことをしたか（工夫した）という，３つの視点で振り返るようにした。

これらの３つのポイントを基に，第２学年の町探検単元「ふぞくたんけんたい　しゅっぱつ」の授業実践を行った。

3. 体験と表現で生まれる主体的・対話的で深い学びを実現する生活科学習指導の実際

3.1. 単元名

「ふぞくたんけんたい　しゅっぱつ」（第２学年）（９月～11 月実践単元）

3.2. 単元のねらい

本単元は，自分の身近な地域を探検したり探検したことを伝え合ったりする活動を通して，『自分

表１　単元「ふぞくたんけんたい　しゅっぱつ」で育む資質・能力

知識及び技能の基礎	・　身近な地域の場所やそこで働く人々の特徴や役割に気付く。 ・　身近な地域で働く人や生活する人の気持ちや工夫に気付く。 ・　身近な地域の場所やそこにいる人々によって，自分の生活が支えられていることが分かる。 ・　挨拶や丁寧な話し方等，身近な地域の人との適切な接し方が分かる。 ・　自分の力で探検して身近な地域のことを知ることができた自分の取組のよさや成長に気付く。
思考力・判断力・表現力等の基礎	・　質問内容や観察する視点等の探検の仕方について，これまでの経験を基に考える。 ・　身近な地域の場所やそこにいる人々の役割について，自分の生活と関係付けながら考える。 ・　探検したことを分かりやすく伝えるためには，どのようにまとめればよいかこれまでの経験や友達との交流を基に考える。 ・　探検したことを絵や写真，言葉等で相手に分かりやすく伝えることができる。
学びに向かう力・人間性	・　身近な地域の場所やそこにいる人々に対して，親しみや愛着をもち，地域のことやそこにいる人々のことを思いながら適切にかかわっていこうとする。 ・　地域やそこにいる人々のために，自分ができることを実践していこうとする。

の家の周りのことを詳しく知りたい。』『探検したことをみんなに伝えたい。』という思いや願いを達成していく楽しさを味わわせ，身近な地域やそこにいる人々に親しみや愛着をもちながら，その地域やそこにいる人々に適切に接しようとすることをねらっている。また，これまでの経験を基に，探検の仕方を考えたり自分なりに工夫して探検したり，探検で分かったことや考えたことを分かりやすくみんなに伝えたりする力を培うとともに，地域の場所の様子やそこで生活したり働いたりしている人々の仕事や役割に気付くとともに，身近な地域を自分の力で探検することができた自分のよさや成長に気付くこともねらっている。このねらいを踏まえ，本単元を生活科で育む資質・能力で整理すると，上記の表１のようになる（表１）。

3.3. 実態について

子どもたちはこれまでに，1年生での学校探検の中で，探検する活動を経験している。また，学校の近くの公園に出かけて遊ぶ活動や，公共の乗り物（市電）を利用して，鹿児島市交通局の見学へ出かけたり，鹿児島市で開催されている木市へ出かけ，野菜の栽培活動で育てたい苗を購入したりするなど，地域や公共施設等にかかわる活動も経験している。それらの経験から，自分たちで探検することの楽しさを味わっていたり，公共施設の存在や役割，それらで働く人々の気持ちや工夫等について考えたりすることができている。また，地域や公共の施設とかかわって気付いたことや考えたことなどを，絵や言葉で表現することも経験しており，自分の体験を他者に伝える楽しさも感じている。

本校の校区は，公共の交通機関を利用して一時間程度で通学できる範囲内であり，非常に広範囲

である。そのため，商業施設の多い繁華街を生活圏とする子どもや住宅地が広がる地域を生活圏とする子ども，田畑が広がる地域を生活圏とする子どもなど，一人一人の自宅周辺の地域の様子は多様である。この実態から，自分の生活圏の地域について探検する活動を設定するためには，子どもたちの実際の生活圏に移動するだけでも一時間近くかかってしまうことや，想定する活動場所が多岐に渡り，担任だけでは引率できず，子どもたちの活動中の安全を十分に確保できないといった課題をクリアする必要があった。

本校は，鹿児島市内の中心部に位置しており，学校周辺には，住宅，商店，事業所，公園，神社，保育所等，多種多様な施設やこの地域で生活したり働いたりしている人々が存在しており，地域の様子について様々な視点から捉えることができる地域である。そこで，学校周辺の地域を探検することを通して，探検の仕方や地域の特徴の捉え方，探検で気付いたことのまとめ方といった探検活動に関する学び方を身に付け，自分の家の周りの探検活動に生かすことで，自分の家の周りの地域に対する気付きの質を高め,地域に対する親しみや愛着をもつことができるのではないかと考えた。このことを踏まえ，本単元での核となる活動を，自分の家の周りと学校周辺の探検活動と探検で気付いたことを表現する活動とすることとした。

3.4. 本単元で想定する子どもの思いや願い，気付きと必要な活動

本単元のねらいや実態，学習指導のポイント１を基に，本単元の子どもの思いや願いの広がりや深まり，気付きの質の高まりを想定し，必要な活動を整理すると，図１のようになった（図１）。

図１　単元「ふぞくたんけんたい　しゅっぱつ」の構想イメージ

3.5. 単元の指導計画（全 24 時間）

第１次　自分の家の周りを紹介する。（２時間）

第２次　学校の周りの探検に出かける。（４時間）

第３次　探検で気付いたことを発表する。（２時間）

第４次　学校の周りのもっと詳しく知りたい場所ごとにグループをつくり、そのグループで探検に出かける。（４時間）

第５次　グループで探検して気付いたことをまとめ，発表する。（５時間）

第６次　自分の家の周りの探検計画を立てる。（１時間）

（自分の家の周りの探検は、放課後や休日等を活用して行う。）

第７次　家の周りの探検をまとめ，発表会をする。（６時間）

3.6. 単元の実際

3.6. 1．第 1 次の実際

ここでは，学習指導のポイント２を基に，『家の周りのことを詳しく知りたい。』という単元を貫く思いや願いをもつことができるような導入を行うこととした。まず，担任の家の周りの様子について写真を用いながら紹介した後，「みんなの家の周りにはどんなものがあるかな？」と問いかけたところ，「私の家の近くには，～～があるよ。」と意欲的に，自分の家の周りの様子について伝えようとする姿が見られた。そして，「じゃあ，みんなの家の周りを紹介してみよう。」と，互いの家の周りを紹介し合う活動へと展開した（写真１）。家の周りの様子を画用紙に自由にかかせ，それを用いながら紹介し合ったところ，「○○さんの家の近くにはパン屋さんがあるんだね。」「僕の家の近くにも公園があるけど，△△くんの家の近くの公園とは，置いてある遊具が違うみたいだな。」と，それぞれの場所の違いに気付く子どもの姿があった。その反面，「先生や友達みたいに家の周りのことを紹介したいな。でも，家の周りの事はよく分からないな。」という思いを持つ子どもの姿が見られた。そこで，その思いを全体にも広げ，「家の周りのことを詳しく知るために何かいい方法はないかな。」と問いかけたとともに，１年生での学校探検の活動を想起させたところ，「家の周りを探検してみたらいい。」と，これまでの経験を基に新たな活動を見いだす姿が見られた。ここまでの活動を通して子どもたちは，「家の周りを探検して，もっと詳しく友達に伝えたい。」という思いや願いが

写真１　家の周りを紹介し合う子ども

写真２　１回目の学校の周りの探検の様子

高まっていたが，鹿児島市の地図を使って本校の校区を考えたところ，「生活科の授業の中でみんなの家の周りを探検することはできるのだろうか。」という課題に直面した。また，「うまく探検できるか心配だ。」という思いをもつ子どももいた。そこで，学校の周りの地域をみんなで探検し，探検の仕方を身に付けた上で，自分の家の周りを自分の力で探検してみる活動はどうかと提案してみたところ，子どもたちもこの提案に賛成してくれ，「探検名人になって，自分の家の周りを探検しよう。」というテーマの基，今後の活動を進めていくことになった。

3.6.2. 第２次の実際

「探検名人になりたい。」という思いや願いを基に，まずは，学校の周りにはどんなものがあるのか，学級の全員で一緒に探検してみることにした（写真２）。「神社があるよ。」「お菓子屋さんがある。」「マンションや家が沢山あるね。」と，町の様子を興味深く観察する様子が見られた。１回目の探検ということもあり，学校の周りにあるもの一つ一つが新たな発見となっており，探検活動の楽しさを味わうことができていた。

3.6.3. 第３次の実際

１回目の学校の周りの探検から帰ってきた後は，探検で見付けたことや気付いたことを伝え合う活動を設定した。見付けたことや気付いたことを絵や言葉でカードに表現するとともに，拡大した学校の周りの地図を使って，どこにどんなものがあったのか，交流し合いながら，探検での気付きをまとめた（写真３）。

探検の振り返りを通して，どこに，どんなものがあったのか地域の建物や施設等の存在について理解することはできたが，その一方で，「神社の建物の中には何があるのかな。」「お菓子屋さんではどんなお菓子を売っているのか知りたいな。」という思いや願いをもつ子どもの姿があった。そこで，「どうすれば，もっと詳しく建物の中やお店のことを知ることができるかな。」と問いかけたところ，「もう一回探検に行ったらいい。」「今度は，お店の中も見てみたい。」と新たな活動を見いだす姿があった。また，「まだ探検名人にはなれていない。（1 年生での）学校探検の時みたいに，詳しく様子を観察したり，お店の人に話を聞いたりしてみたい。」という思いや願いをもつ子どもも見られた。そこで，もう一度詳しく探検してみたい場所を決め，同じ思いや願いをもった子ども同士でグループを作り，今度はグループでもう一度学校の周りの地域に探検へ出かけることにした。

写真３　１回目の探検のまとめ

写真４　インタビューする子どもたち

3.6.4. 第４次の実際

２回目の探検に向けて，どんなことを詳しく知りたいか，そして，そのためにどんな方法で探検するかグループで話し合う活動を設定した。すると，これまでの経験を基に，「お店の人にインタビューをしてみたい。」「カメラでお店の様子の写真を撮ってきて，他のグループに紹介したい。」といった活動が見いだされた。そこで，インタビューすることを決めて練習したり，カメラの使い方を知り，実際に写真を撮る練習をしたりする活動を行った。練習をする中で，「もっと丁寧な言葉遣いで聞いた方がいいよ。」「勝手に写真を撮ったら嫌な気持ちになるかもしれないから，ちゃんと『写真を撮ってもいいですか。』って聞いてから撮った方がいいと思う。」など，地域の人々との適切な関わり方について考える姿も見られた。

２回目の探検は，保護者ボランティアの協力ももらいながら，できるだけ子どもたちの力で探検を進められるようにした。事前に用意しておいた質問だけでなく，観察や地域の人とのやりとりの中で疑問に思ったことを質問する姿も見られ，地域の人々との対話を通して，新たな疑問を見いだしたり，新たな気付きを獲得したりしている姿があった（写真４）。

3.6.5. 第５次の実際

グループでの探検のまとめは，グループごとに新聞の形式でまとめて発表することにした。新聞の形でまとめることはこれまでにまだ経験がない子どももいたため，教師による参考作品や新聞のフォーマットを準備し，見通しをもたせた上で取り組ませた。

詳しく探検できたことで，「お菓子屋さんのお店の名前の秘密を他のグループにも伝えたい。」「神社の中にあったものをみんなに教えたい。」と表現することへの意欲が高まっていた。新聞を作成する中で，「写真があると，詳しく伝えることができるからいいね。」と実際に撮影した写真を使って様子を伝えるという表現の仕方のよさを実感している姿も見られた。新聞には，見付けたことや気付いたことだけでなく，探検をしてみて考えたことや感じたこと，といった探検活動に対する感想を必ず書くように指示した。これは，探検を通してどのようなことが分かったのか，学校の周りの地域をどのように捉えたのかを自覚させるためである。感想には，「お菓子屋さんは，みんなが美味しいと喜んでくれるお菓子を一生懸命作っていて，優しいなと思った。」「神社の中には神様の部屋があってびっくりした。何百年もずっと昔からこの神社は大切にされているのがすごい。」などと書かれており，２回目の探検を通して地域の人々の思いに触れたことで，地域の建物や施設の存在だけでなく，その意味や価値を自分なりに捉えることができていた。

その後，完成した新聞を使ってグループごとに探検のまとめを発表し合う活動を設定した。互いの発表を聴き合う中で，「詳しく調べていてすごいね。」「写真を使ったり，文字の大きさや色を工夫したりしていて分かりやすい新聞だね。」と探検の仕方やまとめ方といった取組のよさに気付くことができていた。発表会後の振り返りでは，「どうして，こんなに詳しい新聞をつくることができたのかな。」と問いかけた。すると，「上手に探検することができたから。」「グループのみんなで協力して探検したから。」「工夫してまとめたから。」と，探検の仕方やまとめ方を身に付けることができたことを自覚し，「これなら，自分の家の周りも上手に探検できそうだ。」「早く自分の家の周りも探検

したい。」と自信と意欲をもつ姿が見られた。

3.6.6. 第６次の実際

自分の家の周りの探検の計画を立てる際には，２回目の学校の周りの探検に向けたグループでの話し合いを生かすようにした。学校の周りの探検活動が活かされ，どんなことを質問すればよいか主体的に計画を立てる姿が見られた。実際の探検活動は，放課後や休日といった授業外の活動となるため，活動に対する保護者の理解や協力が必要不可欠である。事前に文書を配布したり，学級ＰＴＡの場を使ったりするなどして，保護者と本単元のねらいを共有するとともに，探検活動への協力を依頼した。

3.6.7. 第７次の実際

ここでは，身に付けたことを生かしてまとめる活動という位置付けであるため，自由な形式で探検したことをまとめてよいこととしたが，すべての子どもが，学校の周りの探検活動後に行った新聞形式でのまとめ方を選んでいた。探検のまとめは個々で作成したが，２回目の学校の周りの探検のまとめの新聞以上に情報量の多い新聞を仕上げることができていた。

自分の家の周りの探検活動を通しての子どもたちの感想は，以下の表２の通りである（表２）。（　）内は，子どもが探検した場所である。

表２　自分の家の周りの探検活動後の子どもたちの感想

- お客さんのためにマッサージやメイクをしてくれるところがいいなと思いました。これからもお客さん一人一人の肌を大切にしてほしいです。私の住んでいる●●には，こんなすてきなお店があるので，みんなにも遊びに来てほしいです。（化粧品店）
- 僕は，探検をして思ったことがあります。それは，運転士さんの気持ちです。嫌なことがあってもお客さんの笑顔で元気を取り戻して，仕事に取り組む運転士さんたちはすごいと心から思いました。これからもお仕事をがんばってほしいです。（交通局）
- 私は●●ベーカリーのことがもっと好きになりました。二人で朝早くから，こんなにたくさんのパンを作っているので，すごいなと思いました。これからも，お店の人と仲良くできたらいいな，と思います。また，パンを買いに行きたいです。（パン屋）
- ぼくが「●●温泉」に行って，いちばん心に残ったことは，温泉の中にプールがあることです。なんでプールがあるかというと，リハビリのためや外であまり運動ができない人のためだと言っていました。僕は，それを聞いて「●●温泉は，とても優しい温泉だな。」と思いました。なぜかというと，ぼくはこれまでプールで遊んでいただけだったからです。ぼくは，お客さんのためにプールを作っている新とそ温泉が大好きになりました。（温泉施設）
- ぼくは，●●公園を見て楽しい広場だと思いました。この公園のよさは，みんなを笑顔にする公園だと思います。●●公園は，ぼくのたからものです。大人やおじいちゃんになっても●●公園で遊びたいです。（公園）
- 朝早くから働いていて眠たくないのかなと思いました。目標も決めて仕事をしているのが，すごいと思いました。私も大人になったら●●さんみたいになりたいです。（自動車販売店）

それぞれが作成した新聞を基に，発表会を行った。互いの発表を聴いて，「〇〇さんの家の近くのパン屋さんは，お客さんのためにいろいろなパンを作っているんだね。私も行ってみたいな。」「〇〇くんの発表を聴いて，市電の運転士さんの気持ちが分かったよ。僕も今度から元気よくお礼をしたいと思ったよ。」と，感想を交流し合う姿が見られた。

4. 実践の考察

本単元では，２回の学校の周りの探検活動と自分の家の周りの探検活動という３回の探検活動，そして，それらの探検活動を通して得た気付きを表現し交流する活動を設定して実践した。学校の周りを探検する中で地域の施設や人々の存在に気付いたことで，地域に対する興味や関心をもち，そして，その地域と繰り返し関わる中で，地域の人々との対話からその思いに触れ，自分なりにその存在の意味や価値を見いだすことができた。見いだした意味や価値は，他者に伝えたいという思いを引き出し，意欲的な表現活動につながっていた。また，学校の周りの探検活動で獲得した学び方を生かしながら自分の家の周りを自分の力で探検したことによって，探検前はなんとなく捉えていた自分の家の周りの地域に対する捉えが更新されたり，自分自身のよさに気付いたりすることができた。このことから，対象に関わる活動とその活動を通して気付いたことを表現する活動とを子どもの思いや願いに応じながら往還させることは，主体的・対話的な学びを生み出し，気付きの質が高まる深い学びを実現することに有効であることが分かった。

5. おわりに

生活科の特質である「具体的な活動や体験を通した学び」とは，「主体的・対話的で深い学び」を生み出すために，必要不可欠な要素であり，生活科はその創設期から「主体的・対話的で深い学び」を具現化してきた先進的な教科であると感じた。今後も子どもたちにとっての「主体的・対話的で深い学び」を実現していくためにどのような活動や体験を設定していくことが有効なのか，目の前の子どもたちと向き合いながら実践を通して明らかにしていきたい。

付記

本報告は，鹿児島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき，生活科において研究をさらに発展させ，その研究成果をまとめたものである。

主な参考文献

朝倉淳(編著)(2018)．小学校教育課程実践講座　生活 ぎょうせい

鹿児島大学教育学部附属小学校(2019)．新たな価値を創り出す資質・能力を育む授業の創造

文部科学省(2018)．小学校学習指導要領解説生活編　東洋館出版

文部科学省(2018)．小学校学習指導要領解説総則編　東洋館出版